Kenichi Yoshida

J'ai, quelque jour, dans l'Océan,
(Mais je ne sais plus sous quels cieux),
Jeté, comme offrande au néant,
Tout un peu du vin précieux....

Qui [illegible] eur?
J' [illegible] n?
Peut-êt[illegible] on coeur,
Songeant au sang versant le vin?

吉田健一集成

Sa transparence accoutumée
Après une rose fumée
Reprit aussi pure la mer.....

2

批評Ⅱ

Perdu ce vin, ivres les ondes!....
J'ai vu bondir dans l'air amer
Les figures les plus profondes.....

新潮社

吉田健一集成

2

新潮社

Kenichi Yoshida

吉田健一集成

2

［第2回配本］

発　行……一九九三年八月五日

著　者……吉田健一［よしだ・けんいち］
発行者……佐藤亮一
発行所……株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号　一六二
電話　営業部〇三－三二六六－五一一一
編集部〇三－三二六六－五四一一
振替　東京四－八〇八
印刷所……凸版印刷株式会社
製本所……加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが、小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Nobuko Yoshida 1993, Printed in Japan
ISBN4-10-645602-8 C0395

吉田健一集成・2■目次

文学概論 7
Ⅰ 言葉 9
Ⅱ 詩 39
Ⅲ 散文 71
Ⅳ 劇（補足） 102

文学の楽み 113
Ⅰ 大学の文学科の文学 115
Ⅱ 読める本 124
Ⅲ 詩と散文 134
Ⅳ 硬軟両派 143
Ⅴ 東と西 153
Ⅵ 古典の権威 163
Ⅶ 西洋 173
Ⅷ 何の役に立つのか 182

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅸ 現　実　192
Ⅹ 新しいといふこと　200
Ⅺ 生きる喜び　209
Ⅻ 孤　独　219
ヨオロッパの世紀末　225
文学が文学でなくなる時　343
解　題　472

吉田健一集成 2

編集協力　清水　徹

文学概論

莫春者春服既成冠者
五六人童子六七人浴
乎沂風乎舞雩詠而帰

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I　言葉

1

文学が言葉、及び言葉の使ひ方であるといふのは、掛け値なしにその通りの事実であつて、従つてさう言つてしまへばそれですむことであるが、同時にかういふ素朴で基本的なことは、そこまで筋道が幾つも辿つて行けて、それが辿り着く所は同じでも、その途中のことで我々はその事実そのものにどれだけの内容があるかに気が付く。つまり、言ひ方が色々ある時、それを並べることはかういふ場合には繰り返しでなくて、或る一つのものの言葉になり得る限りの輪廓をそこに描き出すことであり、それは常に輪廓に止りながら、さういふ言ひ方のどの一つを取つても、既にそこに何ものかが描き出されてゐる。

これは、言葉といふものの性格と関係がある。言葉はこれを幾つか組み合せて作る文章の一部をなすものであるのみならず、その一つ一つが独立して存在するものであり、これは主格の働きも兼ねてゐるギリシャ語やラテン語の動詞に限られたことではない。凡て言葉であることを得たものがさうなのであつて、その最も解り易い例は、古くから知られてゐる地名に見られる。そこには伝統が働いてゐるとか、多くの人間がその名を言つたとかいふことは、言葉以外のものが言葉に加へられたのではないので、多くの人間が使ひ、それが一つの伝統をなしてゐるのから切り離せなくなつたのが言葉である。これは、その伝統を捩ぢ曲げて生かされた言葉の場合でも同じで、風に逆つて進む帆船が風と縁がないといふことはない。かうして、一箇の二人称単数の代名詞も言葉であり、それが言葉である限りでは、入り組んだ文章に匹敵する。

又、言葉がさうした独立したものでなければ、文章は作れない。弱い文章といふのは、それをなしてゐる言葉の幾つかが、或は、ただ一つでも、その位置を得てゐない為に独立することが出来ずにゐる、つまり、その位置に安定しないでゐるのである。そして一つの文章も独立したもの、或は独立してゐなければならないものであつて、それとそれをなしてゐる個々の言葉の関係は、どうかして残つてゐる古い詩の断片や、わざと終りまでは言はない我々の日常の話し方がその例を示してゐる。詩の半行とその詩の全部、或は或ることを終りまで言ふのと途中で止めることの違ひが、完全であるのとさうではないのといふことではなしに、効果の上でのことであるのは、文章といふものが絶えず或る体をなしながら進み、それに応じてその独立した形が変つて行くものであることを我々に教へる。或はそのやうに、どこを取つてもそこに、又そこまでで言葉が我々を迎へる文章でなければ、それが意味をなす、なさないとは別に、我々はその文章に動かされるといふことがない。

言葉が意味を伝へる道具かどうかといふことで、見方が分れる。初めから言葉が何か意味を伝へる為にあつたかといふことも疑問で、それだけのことならば、今日では例へば図式や符号の方が遥かに正確な場合がある。手真似でもそれは出来て、そこには言葉と呼べるやうな要素は全くない。第一、我々は意味といふのがどういふことかも考へて見なければならないので、それが普通に指すものが、言葉が我々に実際に伝へることの極めて僅かな一部でしかないことは、例へば字引が何であるかに就て多く行はれてゐるのとは別な観念を我々に持たせる筈である。字引で、或は字引でなくても、或る言葉の意味を説明するといふことは、一つの言葉を別なもので置き換へることであつて、その双方の意味が同じである為には、言葉が我々に伝へることの一部分でしかないその意味を更に狭めて扱ふ他ない。その狭められた典型が数学の用語で、ここでは意味の取り違へやうがないが、それ故にこれは符号その他でも表せるのであり、これに対して余分なものが言葉にはあるならば、その余分なものが言葉の大部分なのである。併し我々は、これと同様に間違ひなく限定された内容が凡ての言葉にあると考へることに馴らされてゐて、それを求めて字引を引く時、我々に与へられるのは大体の所がそれらしく思はれるものに過ぎない。

そして或る言葉が或ることを指すと見るのは言葉の性質に背くものではないが、それが言葉の位置でだけでも変ることは、字引風に言葉の正体を摑むことを一層難しくする。そのことに気付かないのは、例へば我々に外国語を習つた経験があつたりするからで、或る言葉に相当する外国語の言葉を知ることが、その外国語の言葉が持つ意味を確めることだと考へる。それまでは何だか解らなかつた外国語の言葉がかうして我々にとつて意味があるものになることは事実であるが、その意味はと言へば、それに相当する自分の国の言葉があるだけであつて、つまり、字引で説明される言葉が外国語であるといふ違ひがそこにあるに過ぎず、それが自分の国の言葉ではどういふことになるかといふことの次には、問題はそれでは、そこに挙げられた自分の国の言葉はといふことに移る。その上に、我々は逆にこの場合、さうして外国語の言葉の意味を探らうとすることで、それに相当する自分の国の言葉も少しも一定してゐないことを感じる筈である。

或る外国語の言葉に正確に当て嵌る自分の国の言葉がもしあれば、これもその双方の意味が符号でも表せる程度に狭い範囲のものである時に限られてゐる。例へば、犬といふ言葉がさうのやうにも思へるが、犬といふ言葉も所謂、犬を指す他に幾通りもの働き方をして、或る外国語で犬を何と言ふといふことはその外国語の意味を説明することにならないのみならず、それが他に色々な働き方をするのも国語によつて違つてゐて、その証拠に、犬といふ言葉から我々が受ける印象も、国語次第で少しも一定してゐない。併しその印象といふものがある以上はと、そこから言葉の意味を確立することを計らうとするものには、同じく言葉にとつてなくてはならない別な要素を例に取つてもいいので、抑揚格、或は弱強格といふ詩形、といふのは、言葉

の発音の仕方はギリシヤ語の詩では軽妙な感じがするので喜劇などに用ゐられ、英語では荘重な悲劇を書くのに適してゐる。

印象と言ふ時、さういふ軽妙とか、荘重とか、或は単に或る言葉のどの部分を強く発音するかとか、それを字で書いたらばどういふ形になるかとかいふことまでがそこに入つて来る。或は、或る言葉が或る幾つかの言葉を組み合せた中でどこに置かれてゐるか、又その言葉、或はさういふ言葉の組み合せがそれまでにどんな具合に使はれて来たかといふことも、所謂、言葉の意味と同様に言葉とその我々の受け取り方を支配してゐて、その総体を言葉の意味と称するならば、言葉はそれを使ふ毎にその意味が変る。その幾つかを追ふのは、学問の上では仕事になつても、幾らでも変るものに一々さういふ方法を用ゐる訳には行かなくて、殊にそれが言葉の意味と呼べるものかどうか、寧ろ言葉そのものではないかと考へられるに至つては、なほ更のことである。或は、ここで再び学問といふことを持つて来て、所謂、言葉の意味は言葉の他の面、例へば韻律と同様にこれを扱ふ独立した学問の仕事の対象になるが、文学では言葉全体を使ふのが目的であつて、それ以外は凡てその為の準備に過ぎない。

といふことは、文学では言葉をその普通の形で使ふといふことであつて、我々が一般に言葉の意味といふことを余り気に掛けないのは、それが我々には解り切つてゐるといふことがあるばかりでなくて、我々が言葉に動かされる、或は兎に角、それから何かの作用を受けるのがその意味によつてだけではないことを示すものである。言ひ方が幾らもある時、といふのは、一応は同じ意味のことを伝へるのに言葉の色々な組み合せ方があつても、我々はその中の或る組み合せに限つて言葉といふものを感じる。ここで外国語のことをもう一度例に出せば、このことは外国語で書いたものを読んでも解つて、何が書いてあるか、字引を引かなくても大体の見当は付く所まで行かなくては、まだ外国語が読めることにならない。つまり、それが出来なければ、我々が受け取るのは字引に挙げてある意味と、それに基いての不完全な推測の結果だけであつて、これは要するに、推測といふことで終る。

それでは、言葉は我々に何を伝へるのかといふ問題に我々は遂に来る。そしてこれは、我々が人に言葉でどういふことが伝へたいのかといふこととも関係があつて、例へば、そこを右へ曲つて真直ぐ行くと、左側に大きな欅の木があつて、その向ひが郵便局だと人に教へる時、我々は別に言葉を使つたとは思はない。言葉を使ふのが目的の文学の仕事に専念してゐるもので、かういふ簡単なことを説明するのが凡そ不得手なのもゐるのは、それが言葉でなくても出来ること、といふのは、黙つて案内しても、或は地図を書いて見せてもすむことであり、或る言葉を選ぶとか、或る言葉を或る別な言葉と組み合せるとかしなければ望む効果が得られないといふことがないからである。併しそれは、言葉を使つても得られる効果で、さうするのが便利なこともあり、又、少くとも今までの所は、その程度のことで言葉を使ふのが普通になつてゐる例が幾らもある。

或は、まだ言葉を使ふ他に方法がないこともあつて、それ故に、我々がそれだけのことでは満足しないものであることが解る。逆にこれを、言葉を受け取る立場から見るならば、別な言ひ方をしても構はないのが明かなのや、相手の目的がはつきりすれば忘れられることになるのは凡て我々に言葉と思へないか、或は不完全な言葉に感じられて、仮にそれが一篇の作品をなすものであることになつてゐても、我々はそれに義理で付き合ふばかりである。従つて、言葉を使ふのが目的でこれを使つてゐながら、それが少しも効果がないといふこともある訳で、この種類の言葉が多くなれば、我々の不満もそれだけ色々な形で現れることになる。言葉があやふやである為の論争も何かに付けて起り、又、言葉の使ひ方を工夫するのが文飾であると見られたりもする。幾ら工夫をしても効果がないならば、これは確かに無駄なことである。或は、多くの言葉を重ねて、それが一定の方向を生じることにならず、併し外観は労作であることから、言葉が本来とは別な意味で手段と考へられるに至る。

これは、我々が言葉から期待するものが、それを使ふ時の目的になつてゐることの実現に止らないことを示してゐる。それは言外の意味といふことではなくて、もしそれがそのやうな性質のものならば、これは言葉の意味に別なのをもう一つ加へることに過ぎない。我々が言葉に求めるのは、納得することであると見ることが許される。例へば、我々は道を教へられても、それは用が一つ足りただけのことであつて、その為に納得する状態に置かれるといふことはない。この場合、道を教へてくれたのが誰だらうと、我々はそれに構はずにお礼を言ふといふことが考へられて、納得するといふことがあるのには相手の人間、或はさうでなくてそれが自分であつても、兎に角、何かの形で我々は人間を感じなければならない。その事実から文学の効用とか、目的とかに就て各種の説が立てられることになつて、その一つに、それ故に文学が、又従つて一つの作品をなす言葉が我々に伝へるのは感情だといふのがあり、これに対してその他にもつと知的な要素もあると見るのが新説だつたりする。

人間を感じるといふのは我々の受け取り方をそのまま述べたまでであつて、ここで知、情、意といふやうな区別をどうしても付けなければならないならば、その他に意志的な要素もあるといふ指摘も免れない。併しもともとが便宜上の区別だつたものを事実と思ひ込むのは、道徳の項目を八つ立てたり、宗教心を三つの美徳に分けたりするのと変らなくて、ここでも厳密を望む時は認識といふこと一つで足りる。文学が感情であつても少しも構はないが、それが所謂、感情で片付けられる程内容が単純でないのは、我々が生活してゐて喜怒哀楽その他、一般に感情と呼ばれてゐるものに当て嵌る形でものを感じないのと同じである。例へば、全く喜びだけを伝へる作品があつたら大したものである。併し人間と人間がゐる世界の関係はさういふ性質のものではなくて、これは、その他の感情がそれに伴ふといふことに止るものではない。例へば、知性とか、良心とかいふことも我々は出版社の広告の文句などでよく見掛けるが、もしそれが嘘でないならば、知性は柔軟な感情の持主といふことで

置き換へることも出来る。又、さうでない知性を我々は信用する訳に行かない。

我々が考へごとをするのは感じなくなることではなくて、何かを望むのはそれを考へることでもある。或る言葉を受け取るとか、それを使ふとかいふ時だけでなしに、一般に我々が我々人間の世界で生きてゐるのはさういふ形によつてであり、我々はどの瞬間にも、自分を単に考へる人間や、感じる人間や、意志する人間に限ることは出来ず、従つて又、感じるのは文学で、考へるのは例へば、将棋を差してゐる最中だといふ風な区別も成立しない。人間の精神がそのやうには働かないので、考へたり、感じたりするといふことはその精神の働きが対象の性質に即して呈する程度の変化を示すに止り、それは言はば、或る瞬間に表に多く出るのはどの色素かといふ種類のことに過ぎなくて、我々が或るものを受け取る形を凡て認識といふことで一括するのと同じ立場から、その認識に達することにもなる精神の働きに就ても、これを例外なしにただ精神の働きと見る方が、少くともそれが一つの生きたものであることを忘れずにゐられる点で間違ひを起さないですむ。

そして精神がさうして働いた結果よりも、その働きそのものを言葉が伝へる時、我々はその言葉も生きたものとして受け取る。これは、人間を感じて納得するといふのと同じことで、それによつて我々は自分の存在を確め、それが他の人間に繋るものであることを知つてそこに、まだ問題の解決は見出さないまでも、それに向ふ為の共通の足場があることを認める。多くの言葉が費されて、それが空白を残すだけであるのは、これが一箇の精神が実地に働いて得たものではなくて、従つてその背後にさういふ働きが感じられないからであり、つまり、他の言葉でも間に合ふものは我々に言葉になつて響いて来ない。その点では、言葉といふものは既に道具ではなくて、或は、それは最初の目的を果して或ることを伝へる為の道具であると同時に、その道具であるのに適したものを探し廻る精神の働きの記録でもあつて、この場合、その正確な記録であることと、道具がその目的に適してゐることは一つであり、これを言葉を探す方から言へば、我々はただ言葉を探す。

真理が何であるかは、人間には解らない。我々にはその観念があるだけで、それでも真理に就て昔から色々と説をなすものがゐるうち、我々は誰かその一人だけに惹かれるといふこともなくて、或るものの言葉は聞き、或るものには心を動かされない。これは信仰の問題を言つてゐるのではなくて、我々はそのやうに言葉といふものを受け取るのである。既に真理が何であるか解らない以上、我々がその説をなすものに心を惹かれる基準はそれが真理であるか、ないかでないことは明かであつて、ここにもそれをなしたものにとつて言葉とはどういふものだつたかの問題が見られる。それは先づ自分を納得させる為の手段、又確かに納得させることが出来た証拠だつたかも知れない。又、言葉は問題ではなくて、ただ自分に対して誠実であることを願つたのが、言葉も潔癖に扱ふ結果になつたといふことも考へられて、何れにしても、その言葉は真理以外に語るべきものを語

ることになつた。

ここに、人間が免れない一つの宿命がある。さういふ言葉を残したものは、自分がかうと思つたことを伝へる言葉に、それを伝へてゐることで価値を認めたかも知れないが、言葉はその為よりも、その言葉を得るまでの段階がそこにその言葉の形で語られてゐるので残つたのである。つまり、人間を感じるとか、精神の働きを伝へるとかいふことは、実地に言葉を使ふ上では何の手掛りにもならないので、精神の働きを伝へる言葉といふものは、それを目当てに探す限りでは、そのやうなものはない。我々はやはり語るべきものを持つてゐて、その為に言葉を探す他ないのであり、我々は或ることが語りたくて言葉を使ふ。尤も、我々は或る言葉を得ることで自分が語りたいのがどういふことかを知るといふことはあつて、我々が語り終るまでには寧ろこの操作が何度も繰り返される。そこには、一般に言葉を使ふといふことが我々に思はせるのよりも遥かに泥臭い、或は、生々しい事情が絡んでゐる。

言葉を見付けることが出来なければ、我々は語りたくても語れない。そしてこの状態が続いた後に、そこに一つの言葉が出て来て、我々は実際には、我々がさうして我々が望む言葉を得ることで一切が決ることを理解する。そのことがあるまでに散々な思ひをしないとも限らなくて、又、それをすればそれでいいのだとも言へず、言葉はそのやうな混乱を記録しないから、それは我々の錯覚だつたと考へることも許される。我々が如何に自分の精神の働きを見守ることに取り憑かれてゐても、それが出来る間はまだ精神は言葉が摑める程働いてはゐないので、その点でも、凡ては言葉に掛つてゐる。言葉を求めてゐる時、自分の精神はただ働いてゐるだけであつて、我々は寧ろ後になつてから、その働きがどの方向を指してゐたかを、我々がその最中に組み合せた言葉で知る。一つだけ、間違ひなく言へることは、我々がどんな目的で言葉を使ひ始めたのであつても、それが終れば初めの目的は、そこにある言葉が示すものに変つてゐるといふことである。でなければ、それは人に道を教へることのやうに言葉を使ふことのうちに入らないか、或は目的が厳しく限定されてゐて、言葉の使ひ方を誤る余地が全くないのである。

かうして言葉が重ねられて、何かがそこに描き出される。ここでもう一度、言葉の意味といふことを持ち出せば、我々はどういふ意味のことがそこで言はれてゐるかといふことよりも、その言ひ方に惹かれたり、反撥して興味を失つたりするので、それでこの言ひ方といふことが文飾とは凡そ違つたものを指すことになる。一つ一つの言葉の配置がさうして描かれたものをそれ以外の何ものでもなくして、それがさうであることに役立ち、どの言葉もその角度からそこに描かれてゐるものを映し出して、その一つを変へれば、全体が別なものになるといふ、さういふ関係が言葉を重ねて行く上での目安にもなる。それ故に、かうして作られたものはそれ自体が独立してゐて、その限りではそれを作つたものを思はせないといふこともあるが、それは自然に生じたものではないので、余りにもそれが自然とは反対

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com